

ルカによる福音書2章1-20節 「天に神の栄光、地には平和」

1A 世の苛酷さ 1-7

1B 神の子、救い主を豪語する独裁者 1-5

2B 宿なしの飼いやおけ出産 6-7

2A 御使いの伝える喜びの知らせ 8-14

1B キリストこそが主 8-12

2B 地の上にある平和 13-14

3A 良き知らせの伝達 15-20

1B 捜し当てた羊飼いや 15-17

2B 心に留めたマリア 18-20

本文

今朝は、ルカによる福音書2章 1-20 節に注目したいと思います。クリスマスとは、Christ Mas つまり、「キリストのミサ」ということで、キリストを礼拝することを意味しています。聖書には、イエスが生まれた時に、そこに来た人たちが、その赤ん坊、また幼子のイエスを拝みに来た人たちの記録があります。赤ん坊については、羊飼いやが、そして二歳ぐらいの幼子の時に東方からの博士が来て、イエス様にひれ伏し、礼拝を捧げました。それで、クリスマスと名づけられました。

1A 世の苛酷さ 1-7

興味深いのは、どちらの出来事も「夜」に起こっていることです。乳飲み子イエスを身にきた羊飼いやたちは夜番の時に、天における、天使たちの光を見ました。そして幼子イエスを拝みに行った東方からの博士たちは、夜に光る星を見てやって来ました。どちらも夜に起こった出来事です。それは、ロマンチックな夜ではありません。そうではなく、いわゆる「暗き世」を象徴しているような夜です。聖書では、夜というとき、しばしば暗闇を表し、悪がある状態を示していることが多いです。しかし、その中にあるからこそ、光が光として輝きます。

先日、クリスマスのお祝いの本場、アメリカのクリスマスについて、興味深いことを知りました。クリスマスの時期には、自殺率が高くなるそうです。落ち込む人々が多くなるのですが、けれどもアメリカのクリスマスは、盛大に行われます。街角を歩けば、クリスマスのネオンで一杯になり、日本の比ではありません。モールにいけば、クリスマスのプレゼントを買うために人だかりになっています。クリスマスに贈り物をする習慣が、アメリカにはあるからです。ところが、その華やかな雰囲気とは裏腹に、人々が落ち込んでいるということです。それは、華やかに見えて、幸せをもたらすように見えるけれども、商戦を争っているようなクリスマスには、幸せの約束は満たせていないということなのです。いや、一見、幸せそうに見えるから、実はその孤独感はさらに強烈に抱くのでしょう。

幸せに見せているようで幸せではない。いや、その見せているところが表面的で、偽善的であるため、心の底では全く幸せではないことに気づき、落ち込んでしまうということですね。

1B 神の子、救い主を豪語する独裁者 1-5

これは、イエスがお生まれになった時の状況でもそうでありました。1-4 節を読んでみましょう。

1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。

時は、「皇帝アウグストゥス」の統治していた時です。彼は、ローマが帝国となった初代皇帝であります。紀元前 27 年からローマ帝国が始まっています。アウグストゥスの前までは、さまざまな戦争が繰り広げられていましたが、その権力闘争の末、彼は北アフリカ、中東、そしてヨーロッパのかなりの範囲を平定し、平和を確立しました。それでこの時期は「パクス・ロマーナ」と呼ばれています。けれども、それはあくまでも武力による平和です。そしてローマ帝国は、前代未聞の長期に渡って栄えた帝国として、世界を君臨しました。

ローマの歴史を見て、その遺跡を見れば、いかにそこが繁栄していたかを見ることができます。けれども、ローマは何百年もかけて、徐々に内側から衰退していきました。ほとんどが奴隷によって成り立っていて、自由人は富と快樂に浸っていました。そして平和と言えども、強権と高い納税がありました。この「全世界の住民登録」にもそれが表れています。紀元前 6 年から 4 年の間の出来事と思われます。これは統治者が自らの臣民がどれだけいるかを誇るために行うものですが、かつてダビデはそれを行おうとして神から厳しい裁きを受けました。自分の所有物を数えるように、住民登録をさせるのです。その時に文句は言えません。仕事をしていようが休まないといけない、妊娠して臨月になっても、長い距離を動かないといけないのです。

ヨセフという人がいました。彼は、イスラエルの王ダビデの末裔でした。日本で言えば、徳川家の末裔のような存在です。今、その子孫の方々何をしているか？ 私たちは分かりませんね？ 政治的な力も何も持っていませんが、ヨセフも全く同じでした。ダビデは、ユダヤのベツレヘム出身でしたが、ヨセフの家庭はガリラヤ地方のナザレに住んでいます。ナザレからベツレヘムまでは直線距離でも百キロ以上あります。南下していく時、ヨルダン川沿いに歩いて迂回しますから、実際はもっと遠かったことでしょう。当時は驢馬あるいは騾馬です。聖霊によってイエス様を身ごもったマリアは妊娠して、臨月になっていました。けれども、今話しましたように、選択肢はないのです。行くしかありませんでした。

2B 宿なしの飼葉おけ出産 6-7

6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

二人はベツレヘムに着きました。けれども、その時に彼女は陣痛が始まり、出産間近となっていました。ベツレヘムの町には、同じように住民登録のために移動してきた人々でごったがえしています。宿という宿が客でいっぱいになっています。そこでようやく、マリアに出産させることができる場所は、なんと家畜のいるところでした。このようにして、救い主を生み出したヨセフとマリアは、皇帝による身勝手な住民登録で大変な不便を強いられただけでなく、雑踏の中で非常に苦しんでいるのに、だれも彼らを手助けしてくれることがなかった、疎外されていたのです。私たちの社会に似ているのではないのでしょうか？

しかし、聖書の与える希望は、こうした生きづらさを超えたところにあります。私たちは讚美歌の中で、そこが馬小屋であるとか、家畜小屋であるという内容を歌いました。けれども、実は聖書にはイエス様が家畜小屋で生まれたという記述はありません。ただ「飼葉桶」とあるのみです。今もベツレヘムに行けばよく分かりますが、そこにはたくさんの洞窟があります。イスラエルでは、非常に貧しい人々は洞穴を家にしていました。そして、家畜をその洞窟の奥で飼っていることもありました。つまり、ヨセフとマリアはそこら辺の洞窟の中にとりあえず入って、そこに「飼葉桶」があったということになります。そしてもう一つは、「布」でくるんでいますが、そこに置いてあったものを使ったのかもしれませんが。

これは、当時の状況を知れば、驚くことが分かります。当時、洞窟は家屋や家畜小屋にも使いましたが、もう一つ、人の埋葬にも使っていました。ユダヤ教では遺体は死んだその人のうちに埋葬することになっています。すぐに死体をくるまう布が必要なので、万が一に備えて洞窟にそのような布を置いておくのです。それから、飼葉桶であります。同じように洞窟には、骨壺が置いてありました。日本の骨壺とは違って、四角い宝物入れのような箱の形をしているので、そこに藁などを入れて、イエス様を寝かせたのかもしれませんが。イスラエル人の考古学者は、こう言っていました。「イエスは、生まれた時点で、死のイメージがあった。生まれた時に、死の運命を帯びていた。」

イエスは、ご自分が来たのは命を与えるためなのだと語られました。「マル 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」私たちが赤ん坊が生まれた時に、どうして死を帯びた様子で生まれなければいけないのか？と思いますね。けれども、イエスの生涯には、これがあまりにも一貫していました。「わたしは、贖いの代価として、いのちを与えるために仕えているのだ」ということです。贖いの代価とは、身代わりのことです。しかも、罪を犯した者の身代わりになって、その刑罰

を自分のいのちを差し出すことによって受けることです。主は、33 歳辺りでローマが、反逆者に対して使う極刑、十字架刑の処せられて死なれました。しかし、それはご自身が極悪なことをしたのではなく、深淵な神の計画があり、人々の罪のために死なれたのです。

幸せなようにみえて、華やかなように見えて、虚しさがある、また落ち込みがあるというのは、人間の根源に罪があるからです。それは犯罪のような罪ではなく、本来、人間が人間として生きるべき指針を見失っているところにある罪です。すべては神によって造られたのに、その天地を造られた創造主に目を向けることをせず、自分は自分で生きています。それはまるで、心臓を動かしているのは自分ではないのに、まるで自分が動かしているように生きることです。そのプライドに、「生きづらさ」の原因があります。これだけ便利で、平和な社会にあっても、虚しくなり、孤独になり、生きている意味が分からないということが起こるのです。

しかし神は、私たちを愛して、その根源的な罪、神を神としていない罪を取り除くために、自らの独り子を人として生まれさせ、そしてローマの十字架にかかるようにされました。それが、キリストが世に来られた目的です。これまで犯した罪が赦され、自分を生んでくださった親ではなく、それ以上に、その母の胎内で自分を造られた神ご自身に戻ることができるようにされました。

2A 御使いの伝える喜びの知らせ 8-14

1B キリストこそが主 8-12

8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。

場面が一気に、ベツレヘムの郊外にある丘に移っています。羊飼いたちが羊の群れを飼うことができる丘が、その町の周辺にありました。いや、今でもあります。今でもベツレヘムの町を少し離れると、羊飼いの姿を見ることができます。パレスチナ・アラブ人の子供たちが、羊を飼っている姿を私も見かけました。羊飼いという仕事は、社会的には底辺の仕事です。当時も同じで、羊飼いは社会から外れているような見方がされていました。

しかし、彼らには誇りもあったと思います。なぜなら、ここはユダヤ人の王ダビデの町です。ダビデの世継ぎの子から救世主、キリストが出て来ると言われている町です。ダビデ自身が若い時、羊飼いでした。さらに、ベツレヘムはユダヤ人の祭りで、過越祭のためのいけにえの、羊を育てる所でもありました。過越の祭りには、羊を屠って、その流された血によって、罪赦されるとされていました。ですから、イエス様のお生まれになったところは、ここにおいても特別だったのです。いけにえの羊が飼われているような所で、お生まれになりました。

ともかくも羊飼いは、社会から投げ出された人々です。けれども、神殿の犠牲のいけにえのための羊を育てている、大事な働きをしています。言うならば、空港で海外旅行に行く華やかな姿とは

裏腹に、荷物をしかるべく飛行機の中に入れて行く従業員のようなものかもしれません。あるいは、華やかなディナーの会場の裏で、ゴミの収集で働いている人々かもしれません。どれだけ私たちは敬意を払っているか？と言えば、していませんね。大事なのに、人々はないがしろにします。しかし、そういった死角に対して、神は大いなる栄光をもって人に臨まれるのです。

9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。
10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」

天使がやって来ました。羊飼いは恐れていますが、イスラエルの民に対して大いなる喜びがあることを告げにきたと言います。それが、「ダビデの町で、救い主がお生まれになった」ということです。そしてその方こそが、主であるキリストだということです。それが誰だかを分からせるために、飼葉桶に布にくるまって寝ている、みどりごだということです。

イエス様には、いろいろな呼び名が与えられています。「救い主」ということ。また「主」とも呼ばれています。他の箇所では、「神の子」とも呼ばれます。ローマについて少し調べると分かるのですが、これらはすべて皇帝カイサルに対して使う呼び名です。ローマ皇帝は神格化されました。神の子であり、神であるとされました。そして、市場に入る時には、皇帝の像があり、その前に焼香台があって、焼香を焚いてから中に入らないといけません。売るのも買うのも、それをしないとできなかつたのです。そして、世界を平和にもたらした救世主、救い主とも呼ばれました。またすべての主ご自身であるともされました。しかし今、天使たちは、この布にくるまれた、飼葉桶に寝ておられるイエスこそが、ユダヤ人の待ち望んでいたキリスト、メシアであり、この方こそが救い主、主であられるということです。そしてイエスこそが神の子であるということです。

一方で世界帝国の皇帝であります。今は超大国アメリカの大統領がいますが、大統領どころではありません。皇帝は、はるかにもっと大きな権力を有しています。もう一方で、片田舎ナザレに住んでいる、誰にも知られないように見えるヨセフの家があります。皇帝の鶴の一声で臨月なのに旅をさせられ、洞窟で出産しなければいけない境遇です。しかし、今、どちらが世界に影響力を持っているのでしょうか？イエス・キリストです。紀元前、紀元後と、世界は人類全体の歴史を、イエスの誕生を境にして分けられたのです。このような卑しい生い立ちをイエスは持っておられるのに、これまで何億、いや何百億の人々の人生が変えられ、社会が変えられ、そして国が変えられ、世界がひっくり返りました。日本にも数多くの人々がその影響を受けています。

実は、アウグストゥスが住民登録をせよという勅令を出したのも、全てが神の御手の中にあった

のです。ミカという預言者が、このことの 800 年ぐらい前に、預言をしていました。「5:2 ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」ベツレヘムで、キリストが生まれることを前もって予告していたのです。ですから、皇帝は自分の思うままに臣民を扱っていたのではなく、主なる神が思われるままに皇帝を扱っていたのです。これが、神を信じること、キリストを信じることです。キリストにあつて最も小さき者、弱き者は、世におけるもっとも大きい者をも動かすことのできる祈りを持っています。

みなさんは、どちらを「主」としているのでしょうか？この世界で「何となく」生きているのであれば、この世にある価値観、ローマ社会と同じように、ただ皇帝の意向のままに生きているということになります。しかし、その「何となく」というのが、自分を最も縛り、虚しくさせています。生きるとは、自分が主としている方を明確にすることです。イエスを主とすることは、自分の弱さ、小ささ、罪深さを認めることですが、同時に、どんな強い力であってもそれに屈しない自由を得ることができます。本当の意味で生きることができます。

2B 地の上にある平和 13-14

13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

御使いが大勢来ました。そして神を賛美しました。私たちが歌いましたが、無数の天使たちが天で神を賛美したのです。その内容が、天において、神の御座があるところで、栄光があるようにというもの。それから、地の上では平和が神の喜ばれる人々に与えられるようにということです。

この平和は、外側の平和のことではありません。パクス・ロマーナは、確かに表向きは平和ですが、内実は人々の葛藤、落ち込み、虚しさ、抑圧などを与えていました。偽りの平和、平穏と云ったらよいでしょうか？ここでの平和は、心の中の平和です。神の喜ばれるところにいる人々に与えられている平安です。どんな暗き世においても、決して消えて行くことのない光が与えられているので、希望を捨てないでいることができる平安です。

私たちが知らないといけないのは、天における神の栄光なしに、地上において真実な平安は得られないということです。この人間の世界を超えたところの、天地を造られた神の住まわれるところから来る、その栄光に触れる時に、全き平安を得ることができます。人には、与えることのできない平安です。しかし、天地が過ぎ去っても、一ミリとも動じることのない神の王座から来るものは、いつまで変わりなく私たちに流れてきます。

3A 良き知らせの伝達 15-20

1B 捜し当てた羊飼いの 15-17

15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。

羊飼いたちが見た者は、ユダヤ人たちが待ちに待った、キリストが来られたというもの。こんなすごい知らせはないということで、興奮しながらベツレヘムの中に入っていき、飼葉桶で寝ている嬰兒を捜しに行きました。そして、捜し当てると、そのことを興奮しながら御使いから告げられたことを話したことでしょう。

人というのは、良い知らせを持つとこのようになりますね。これはとても活きている姿です。私たちの教会では、毎年、尾瀬のほうに行き行って旅行します。6月の水芭蕉が生える時の尾瀬、また10月初めの紅葉など、戻ってくると、ぜひ他の人たちにも行ってほしいと願って、感動をもって他の人たちに話すわけです。まるで尾瀬の伝道師になっている感じですね！だれでも、何か良い知らせがあれば、誰から頼まれることなく話すものです。人には、良い知らせがあつてこそ、自分が生きていくと実感できるのだと思います。そして、私たちキリスト者には、羊飼いと同一良い知らせを持っています。それが、救い主である方が私たちのところに来てくださった！という感動です。だから、人々に知ってほしいと願うし、いわゆる「伝道」をするのです。

2B 心に留めたマリア 18-20

18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

みなが驚いています。イエスの生涯を書き記している福音書には、数多く「驚いた」という言葉があります。これまで聞いたことのないようなことを聞くからです。目にしたことないことを見て、思いつきもしなかったことを知るからです。前代未聞のことということです。

けれども、多くの人はいった前例のないことは、無かったことにするか、拒んでしまいます。あまりにも非日常的であり、そこに自分の身を投じることはためらってしまうからです。私は、信仰を持ったのは、実は29年前の今頃でした。落ち込んでいました。クリスマスの礼拝に出て、それから家に帰って、ひとり自分の部屋にいました。これまでのことを悔いて、それで神のことを思い出しました。「これまであなたを無視して生きていました、ごめんなさい。」と祈りました。すると、信じられないことに、頭のとっぺんからつま先まで、こんな惨めな醜い自分を受け入れている神がおら

れることを知りました。その愛に打たれて、涙を流して「ありがとうございます」と祈りました。けれども、自分は両親は普通の、仏教や神道の人です。キリスト教とは全く無縁でした。ですから、クリスマスとして生きるのは、清水の舞台から飛び降りる思いでした。それは、ただ感動するだけでなく、よく考えて、それで自分の生活、人生をこの方に任せる決断をしたからです。

それが今、ここでマリアが行なっていることです。「しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。」思い巡らすというのは、全く理解できないことが起こっても、それで感情的に拒むのではなく、よく考えて、どういうことかを咀嚼するのです。そして時が来たら、ああ、そういうことだったのか！と悟ります。みなさんにも、そういう時をもってほしいのです。今のクリスマスの話は、初めて聞いたかもしれません。そしてそれなりに、心打つものがあったかもしれません。けれども、驚くだけでなく、思い巡らしてほしいのです。

そして、この羊飼いは、喜びに満たされました。神をあがめています。なぜ、そのように充実したのでしょうか？それは、そこにキリストがおられるということを体験したからです。世の中では、いろいろ、どうしようもないことがあります。ローマ社会のように、平和なようでも、酷い目に遭うことがあります。また、宿屋から締め出されるような疎外感を感じるかもしれません。アメリカのクリスマスの時期のように、いや、日本でもそうでしょう、人々が幸せそうに見える時に、寂しくなるかもしれません。心が満たされないと感じます。その時に必要なのは、何かをすることではなく、誰といるか？であります。イエスが生まれた時、この方はインマヌエルと呼ばれました。「神がともにおられる」ということです。この赤ん坊のイエス様を見て、羊飼いが大いに喜びましたが、神が共におられるということを知りさえすれば、自分に神がおられる、主イエスがおられることを知りさえすれば、これまでもがき苦しんでいた心は、完全に満たされ、全き平安を得られます。